里見八犬傳

拾九編 五十

3416
102

第九輯

曲亭翁口授編
受教婦幼代稿

八犬傳 結局下 編

柳川重信画
渓齋英泉画

文渓堂精刊

南總里見八犬傳第九輯巻之五十

東都　曲亭主人編次

第百八十回上附録目

一姫一僧死生栄貴を等くも
孝感力芸詠歌奇異を賛も

却説扇谷山内の面音領。定正と顕定里見と和睦整て。會盟の礼を果せりが。誠使熊谷二郎左衛門尉直親は既ふ帰京の時えあり。足ふよりて定正顕定使者と室町殿へまゐらせて。罪過恩免を拝謝し奉らんとて。定正の使者。白石城父重勝。顕定の使者。齋藤左兵衛佐高實。両家の伴當數からぞ。隨即直親ふ相俱して明日啓行を致さとゝ。その日直親より。快船の使をのく。勅使代秋條廣當ふ件の礼を告しかど。廣當は敢ひそぐぞ。先其使をかへ遣りて。却犬江親兵衛と。蜑崎照文と招ひよせて。告るふ件の礼をもてしく。聲を低て又いふ。熊谷帰

京の告あれども。這回は咱等他と一路児ゝ做るべくば。何とぞ他は両管領の使者と
倶ゝ。我は是勅使代ゝ。且各と伴ふべくば。他ゞ下風ゝ立て。おくそりく四五
日を歴て。歸路ゝ赴まく思ふ。先ゝの義を安房殿へ稟ゝ。とありゝ。親兵衛
も照文も一議ゝ及ぜ諾るゝ。退りて先両家老と。七犬士等ゝ告知らせて。却一同ゝ
義成主へ那議を申え上ゝ。義成主點頭て。然らば我と義通の名代ゝ。照文
兼帯たるべき者。狡八犬士等ゝ受領の拜礼ゝ上洛せばあるべくば。但ゝ老館義実の
御名代ゝ。何人を欲得参せべき。御意を伺ひまゝらん。と問れて。親兵衛照文ゝ。
応ゝ共伴ゝ。滕を找めく稟ゝ。其義ゝ往昔老館の御意を兼ゝる。
這回上洛の御名代ゝ。大こそ相応ゝ。我ゝ久ゝ又栄門児ゝ。非如升進の
朝恩ゝ。義成義通と同ゝ。且ゝ大ゝ二十餘年。幼脚ゝ東の八箇
国のゝ。皇城の地を踏ざれば。折ゝ。あるべくむ。と仰られ。とゝ。義

成主又點頭て。有理其御意こそ最妙られ。然らば、大を召べ。とゝ。そゝ。照文
答て。否那法師ゝ。東西御和睦の歓びを稟上ゝ。方僅参りゝ。と。申ゝ。遠
侍ゝ。申ゝ。と告れば。義成主微笑て。開ゝ幸の。ゝ。疾召ゝ。と。吩咐。ゝ。後
方ゝ。作ゝ。近習の毎。応も果ぜ身を起て。次の間投て退りける。姑且て、大
法師ゝ。引れく君邊ゝ。ゝ。当下辰相清澄照文。大士等も卒と。ゝ。ゝ。
席を譲りゝ。ゝ。大法師ゝ。恭ゝ。義成主ゝ。拜見て。和睦の歓びを稟ぜ。
親兵衛照文執合て。師父ゝ。知ゝ。目今恪々の仰ゝ。件の一議を
告知らば、大ゝ。聴ゝ。眼を睜て。開ゝ。と。難義の御詞ゝ。家人ゝ。相て。各位と共伴ゝ。
然る晴がましく御名代ゝ。立く京師へ参るべくとゝ。思ゝ。我身の昔を。
れば。必死の罪と宥められて。頭髪を首ゝ。換させ。ゝ。老侯の御大恩を。今さら
空ゝ。仕らん。況今那君の御名代ゝ。擇れゝ。生甲非文。とゝ。縦水火の中とも。

○文溪堂藏

辭ひまうべ不義不忠の御諚義りいなぬ参るべくと繰返しく若亨せば義成主欲びく。然らば事既ふ急え照文ハ明日ハ大を引て瀧田へまゐりて老館ふ去の義を具ふ少え上く猶御旨を請まうね親兵衛信濃下野ゟ自餘の犬士も共侶ふ逆旅の准備といそぐべ。又六郎兵庫助ハ朝廷并ふ室町殿へ献るべ品東西と有司ふ課て調達もべくと言送もう宣いもれば大家齊一言義ーてうち連立てで退出ける。左右ゟる程ふ暑熱弥増六月五日の朝秋條將曹廣當ハ明日の旦刻ふ當所を退りて。歸京もべくとふ告あり。かば義成主ハ又親兵衛と照文とのく。餞別の人情あり去向ハ洲崎の港口ゟ相摸ゟる大磯へ投渡して。東海道を上らやくべくと豫定せられ。かば犬江親兵衛犬塚信濃犬阪下野犬山道節犬村大学犬川荘介犬田豊後犬飼現八兵衛ゟハ蜑崎照文、大法師と皆廣當ふ相俱ーて出船の纜を解まくも。約莫這僧俗十名の伴

当ハ胡意畧ーて三ヶ月ゟ鶴内葉四郎猿岡猿八直塚紀二六漕地喜勘太を首ゆて。輕卒奴隷夫役あり。廣當の従者と俱ふ百五六十名許るべ。六月六日の早天ふ主僕巨舫ふうち乗りて大磯を投て漕まるふ旦刻涼ーに順風ゆえの日亭午の時候ふ件の浦ふ来ければ這里ゟ船を洲崎へ返して陸路と西へ赴くふ貌姑峰足柄ハ嶮智ゞ故郷ゆえ。伊豆ハ荘介の故国るれば有縁ふ懐舊の情るにふあらば恁而日ふ歩ゆえ夜ふ歌り。やくと十餘日ふて障ることく京師ふ来ふけり。登時秋條廣當ハ室町殿へも朝廷へも返命を奏せんとて別れく其方ふ赴にーかば、大照文八犬士ゟハ二條頭ふ歌店を求めて躯く熊谷ゞ宿所ふ出て義實義成義通の名代、大照文並ふ八犬士ゟる東西和睦恩命の御答又君臣拜任の御礼ふ参上の義を告ーかば直親則對面ゆて其上洛の速ゆるを労ひて明日室町東山の両御所へ参上るべくとて其進退を指揮ゆ。

〇文溪堂藏

且扇谷山内の使者白石重勝齋藤高實に拜礼の事果て大昨日帰
国を許されーかば岐岨路を東へ退りて恁れば各も遅参まべーらべと期を推
く。斗ぐ儘旅宿へ返されけり。然べ次の日、大照文八犬士等に倶に朝服を整
へて伴當夫役を従へて。已牌の左側に室町殿へ参上りて里見義實義成親
子の名代の使者並に家臣八犬士等。謝恩の為に上洛の義を申え上て義成主の
呈書と拜任の贄多種を進らせーかば、大照文八犬士を正廳へ召らせて管領
畠山政長對面あり。熊谷直親執達ら。當下政長に、大照文八犬士等に
向ひて義實義成父子の忠信善政と八犬士諸臣等の勲功を先参て今日
も汝達將軍家(足利義尚)に拜見の誼を饒さるべに上申昨日より御欠安まりませば。
目今の誼に及れぞ且汝達が参内も異日の御沙汰あるべに宿所に退りて其折を
俟なるべーとありーべ、大照文八犬士等に先度に懲りて妙ならべと思ふの元辞

難て只得唯々と羮まりて退りて駐く東山殿へ詣て東西を献まるも尠か
らぬ其帰路に管領政長及評定衆の諸邸をうち巡りて献残の人情を齎
まるも亦差あり。諸礼やう多く事果て三條の宿所に還りーまり日を累ね
ども御沙汰なければ誰に逗留の徒然に堪ざるべに、大法師に炎暑を犯
て日毎々々に散店を出て洛内洛外へぺさーと日枝鞍馬愛宕の山
或に紫野なる大徳寺に参禪して一休和尚の迹を尋て靈山靈地名所舊蹟
に至ざる限るーかば大塚犬坂自餘の犬士も又照文も迭代りに杖を京師の名
所に曳ども獨犬江親兵衛のみ京童ら呼知りて靈虎射けに勇少年ら復
来て存ると觀べーとて他ら呼えーかばるさく思ひく宿所に在り。
他に京師に去歳の秋より逗留久ーかりければ自餘の犬士に同ーかで珍らー
かる故もあるべ。恁徒に日を過ーて十餘日に及るーかば朝廷に秋篠廣當

奏聞せ聞召せ所里見義成の仁義善政并ふ八犬士の忠孝智勇其淵源ハ伏姫の
孝烈神靈の致所且、大法師ゞ二十餘年の幻脚勤苦の利益をりく八
犬士と索ゆく里見の家臣ふ倣ゆ他ゞ出家堅固の功德都佛意ふ稱
ふべき事及蜑崎照文ゞ年来招賢の使ゝて功ヨヲかりゝ事ゆ廣當ゞ
安房の稲村ゆ人の噂ふ聊知る処正ゝかりける其顛末の奇くも又妙なれば
帝と首をり関白殿下殿上人地下の毎ふ至るまで疾其十個の僧俗を見ま
くゆう思召ゝかゞ屢室町殿へ他ゞ参内を御催促ありけり有徳ゝ程ふ義
尚公の病着座りゆひゝかゞ先里見の使者毎を参内させ後ふ當御所へ
召せゝと則管領政長より、大照文八犬士ゆふの義を下知ありゝかゞ
、大照文犬士ゆハ次の日朝服を敕正ゆ且伴當夫役ふ臨時の調貢を捧
げさせく南大門より参内せ秋條廣當案内ふ立て御階の下ふ参ゆむ當

下、大照文ハ義實義成の奉獻の上書と當職の辭表を呈されゞ孰
奏の公卿受合ゆそ且仰ゆる義あり。照文、大ハ左少将と治部卿の名
代ゆれゞ權ふ外殿を許さゆふ又八犬士ゆハ陪臣ゆ且自分の拜礼ゆれ
ども國の為ふ乱を撥め或ハ霊虎と對治ゝて宸襟を休め奉りける其
功共ふ鮮少ゆらゞ。とゆく品義ふ持資入道道灌ゞ上洛参内の例ふ
依るべゝと。是亦權ふ外殿ふ擬せられて。倶ふ天盃を下されける。其後仰
出ゆる里見左少将其父治部卿と君臣新恩の官職を辭ゆらまく欲
ゆる義ハ勅許あり。今よりゝて後君臣倶ふ宜く前官たるべき者也。就て左少
将の女兄伏姫の孝烈ゆる死後ゆ屢神靈を顕ゝて祐けて其國ふ大功あ
ゝ事。又、大ゞヨヲ年幻脚の事。今茲ハ水陸施餓鬼の折法驗利益揭
焉ゆ秋條将曹廣當ゞ奏聞せ叡感特ふ浅くゞ故ふ伏姫と

齋して富山の神に做さべく、大法師を推登して大禪師に做さべしと宣下わ
ア。如斯最も畏し帝宸翰を染させゝ。富山姫神社と云ふ五大字の勅
額を賜りつ且、大禪師に位記と僧衣を恩賜あり。八犬士と照文に巻絹
各二巻をぞ下されける。寔に異例の朝恩ゑれば、大照文八犬士等は倶に戰戰
兢兢と拜しまつりつ。歎びあまりて。宛天の浮橋を渡り果せ。心地あそ被し
連てぞ退出ける。然べこの日関白殿を首めて百官束帯の袖を連ねて。是を
觀る者。尠からぞ。帝も殊簾の裡より。まそ那毎を亦内しうち含笑せゝ給ひ。
然べ又その次の日に、大照文八犬士等は室町殿へ詣でつ。義尚公に見参せ管
領政長評定衆諸侍。熊谷直親に至るまで。咸正廳に出仕まそ。里見の
毎と召よせらる。室町殿着坐の時。管領政長奉りて、大照文犬士等に
台命を傳る。房州朝武の恩命に從ひまつりて定正顕定と。和睦な

神妙に弥善政を施し。隣國と和順して。東國泰平の功を衍べつゝぞと。
仰出さるゝ。且御教書を渡し。歸國の暇を賜りける。義尚公の豫りて欲し
めすまゝ。八犬士の武藝を試相て。殊に勝れる者を留めて。京師の行城に
まつべしと思食さるけれども。京家の武士近習の壯佼等ゞ那支を忘れ能を媚
て。迭代りに讒しつ傾け。亶に者ヨメりしかば。遂に其義を停られて。歸國を
許しめ給へ。且その時管領政元。當職を罷られて。本領阿波に在りしかば。八
犬士は皆幸に恩徳の間を免れて。安房へかへり。のちに伏姫の神號勅額
、大禪師の僧官に。思ふに優さる。朝恩ゑれば。歎び勇まざるはなく。廣當直親に
別を告て。次の日に條の歇処を立去りつ。伴當夫役を從へて。岐岨路を安房へ
いそぐめりつ。大禪師に做されしを。敢歎ぶ心なく。あらびもがなと思ひつゝ。恁而
這一僧九士は。主僕百十數名。東を投て。かへりつ。其路只一日なりしかば。又日に歩み

夜ふ歌う。美濃の垂井を過る時。犬塚信濃い、大照文と自餘の七大士
等と喚留めていふやう。這里なる金蓮寺い在昔嘉吉元年五月十六日春
王安王君御事あり一時我大父大塚匠作三戍其御級焉を見くふ堪ず
兵を敵ふ血戰して竟ふ戰歿してけるふ我父番作一戍い當時少年なり
けれども忠孝武勇ふ匿しかねば當日群集の中ふ在り親を援けく跳出
た。両公達を劍なるりけ。牡蛎崎某甲を殺る捕りて春王安王君の御首
級と父匠作の首と奪ふて多兵を殺脫け辛くして信濃路ふ走りて御獄
大井の間なる小道場の墓所ふ三級の首と悄地ふ瘞めなりまれと我身髮若
歳なり一時親の昔話ふ多知りたり。今料らずも這地を過れば誘立りく故
ふ迹を見て曳くべ。とふふ大家諾て。あるべ。と心ゝ。と両三町ゆてこそ
れば一座の梵刹あり。其三門ふ掲げる遍額ふ金蓮寺と書りたれば問でも

あるに茲へけりとそ。犬塚と先ゆて。大家寺内ふ入らまくせ一時但見東ゆさらり
まそ。年齡四十有餘なる賤夫の紛裝鄙俗なる。両箇の小瓶と勝着なる杖を
肩ふうち樹つ。凜ゝく凜なる程ふ八犬士を見出ーけんゝく走り近づく犬塚
信濃ふうち向ひく。恐るゝ問給へ這刀祢们の御中ふ安房の里見殿の御家臣
なる犬塚主い在さぎやと。問れて信濃い訝るゝ并ハ何事ぞ。汝の問ふ犬塚信
の濃い我へと名告ふ件の賤夫ハ。奇也々々と。合笑て。やゝ。杖とうち下ゆて。跪居て
信濃ふ告るやう。最卒尓ゆへども。小可ハ信濃なる。大井の驛ふ程遠なる。小
條村の莊客ゆそ。息部局平と。喚做ゆ者でゆへ言長くとも。聞一食ね。烏滸ゞ
ゆ一ゆ說るゝ。小可が親へけ。息部是非六なる。信濃國の人氏へ。井丹三直秀
主の老僕ゆそ。嘉吉の乱ふ殉肚所て。人ふ誉られ。ゆゆ。當時小可ハ總角ふ。母と
俱ふ舊里ふ在り。寒農でゆへ母の世ふ在り一時も。主家の後の事ゆゞゆも知ば

文奚堂蔵

文奚堂蔵

いひしーふ去る夜三夜霊夢の告あり。けり。辟言び甲冑あくる一個の老武者我枕
べ方ふ立ゆひく我ハ嘉吉ふ戰歿あくる。春王安王君の小傳大塚匠作三成是
ゑり。當日我子番作一戍ゞ忠義の梓に。両公達の御首級及我首を埋く
恁々の地方ふ在り。然ども美濃の金蓮寺ハ両公達御終焉の梵刹ゑるとべ。
那里へ返ーまゐらせまく欲ゑ汝悄地ふ主僕三箇の髑髏を穿含りて。垂井の
寺へ齎ゆべ其日必我孫ゑる里見の家臣犬吉の一人犬塚信濃成孝と喚ゆ。
者ふ逢ふとあらん其折這詛と他ふ告ゑべ成孝宜く計ふべ。努ゑ疑ひそよくせよと
示さる。三一度のゝゑゑべ霊夢三夜ふ及びーかゞ。うちも聞れぎ件の如く。
ひーふ果ーて刀祢ふ逢まゐゑ。噫奇ゑりとも異かりけゞ。神謀ふいぎやと言老実
達て告ゑるふゑ成孝ハ愕然とうち驚ゑく且歎びて。原来汝ハ然ゑる者ゑ。
我も亦昨夜の夢ふ其詛と親の告ゆひゑと見ー霊夢ゑありゑゞ。泡沫夢

幻の果敢ゑを憑むべゑふあらぬれば。人ゆ説も知せざりーふ自他霊夢の異ゑりべハ。
今ゆゑ何ゞ疑ふべゑ誠ふ不思議の事ゑりゑと荅て。軈て自餘の犬士と。大照文を
見ゑ。各目今ゆゑ如ー。咱ゆハ當寺の住持ふ告て。両公達と我大父の髑
髏を改葬るべー。ゑれども律令ふ改葬ハ子孫必二日の忌あり。伏姫神の勅額ふ
然ーも憚りゑれふあゞ。各位ハ先ハゆふ咱ゆハ這詛を做ー果ー。後よりこそ
ゆくべゑれ。とゆふを七犬士ゆハ少あぞいゞでゑ然ゑる僻ことせん。和殿の大父ハ我们ゞ大
父ゆも異ゑゞ。然ゞ共侶ふ逗留ーて其葬と幣助てん。と議まれゞ。大も倶ふ
ゆゑゆ。佛事ハ是出家の役ゑ見捨てゆくべゑ足ハゆりゞ。咱ゆも倶ふと議ー出
るゞ。照文ハ推禁めて所詮甲ひとらゑとり。皆這驛ハ逗留ーて。其葬を果ーて
後ふ倶ふかゝりゆくとても既ふ御名代の事果ゑれゞ。懈るふ似て合ゑふあゞ。咱ゆハ
勅額と守り奉りて當驛の歌店ふ在ん這美いふと談まれゞ。大家ゆ佐ゑ點

頭て。其議説ゐて穩便へと惴るを信濃の禁めそらゐ。開ハ辱ゐ事ゐ。今
夏人數ゐて寺内ゐ入らゐ。反て事の障りゐん各位ハ先宿投て事の成るを竢
ゐ。咱等ハ這局平と伴當四五名を從へて入りて寺僧ゐ相譚ふゐ。とふゐ大家
諾ひく。先紀二六喜勘太等ゐ吩咐て。好宿執れそ遣ーけり。小程ゐ犬塚
信濃成孝ハ局平等を從へて金蓮寺の玄関ゐ呼門つ。則役僧ゐ面談ゐく。
告るゐ追葬の事ゐ及べゐ役僧亟ゐ答難て。躰て客殿ゐ請待しつ。茶と看
めるを程ゐ住持出く對面を當下成孝ハ住持ゐ向ひて告るゐ右の如く。且
局平ゐ靈夢の事さ文明々地ゐ説ゐ住持ハ冷く感歎ゐそ。那両公達の
ことも。然しも京都將軍家ゐ憚りるゐ。ねども既ゐ許ヨヌの年を歴て二四の
御代代らせゐべ。今ハ已忍べもひゐ。心ゐてこそひゐれとゐ答ゐ障りきゐ。成孝
歎びて又ゐ。咱等ハ去向をらそゐ者ゐ且一路の主僕百三十名ゐ。開ゐ中ゐ

七人ハ。咱等ゐ義兄弟ゐ。一個ハ今番京師ゐ。大禪師ゐ做されゐ。大と喚
做を師父ゐ。ゐり。皆葬事を資んとゐ。俱ゐ當驛の客店ゐ在り。尚日影ハ高
かるゐ。今より改葬せきく欲を。誰を許容れゐ。ねかー。と請れて住持ハ推辭ゐ
由るく。開ハ性急るる事ゐ。旅中とあれば是非ゐ及ぶ。左ゐも右ゐも彷ひて。と
答て。坐の役僧ゐ事怎々と吩咐て。辭して奥へ退りゐる。當下成孝ハ件の
一義を、大禪師と七犬士等ゐ告んとゐ。玄関ゐ出て。ゐり。伴若黨ゐ吩咐て。驛の
客店へ遣ゐ。却局平ゐ癇しゐる。両箇の小瓶の枕を解せ。悄地ゐ蓋を開て
見るゐ果て一箇の小瓶ゐ。小瓶両箇の髑髏ゐり。又一箇の小瓶ゐ大人の髑髏
ありければ。哀悼の涙胸ゐ満て。泫然るを。然氣ゐく。多早く蓋をうち再復ひく。
故の像くゐ掛る索を。局平ゐ伯せ。然而役僧ゐ髑髏の事を。生ぜて指揮ゐ
任せ。ゐ役僧則心ゐて。一両個の道人ゐ。両箇の小瓶を受含らせて。躰く本

堂る。僧の御前に居ふける。小程ふ。大阪大江大山大村大川大田犬飼等の七犬士ハ、大禪師を先ふ立て伴當夫役過半を引て金蓮寺ふ来よけれバ道人案内して客殿ふ造らるむ成孝是ふ坐を譲りて改葬の事恁々と速ふ告知まれバ大家歎ぶ開ダ中ふ、大ハ然りとと微笑て酒家ハ使の来ぬると躰て其詛るゝんと思ひ〜ぶ夫役等をさ〜ゐて来れり他等ふ課て故墳を穿起させん為ふとふ則ふ役僧ハ又遽しく出て来る衆人ふうち向て長老諸彦光臨を展すくを。住持拜面をゞけれぶる。法事ふ程ふくハ〜葬果て見参ゐゞ。各礼服の御准備ハやと向へゞ成孝然シハ衣裳ハ皆准備ありのゝ出ぬへと促せゞ。役僧ハ向と応も果ず。走りて奥へぞ退りける。恁而沙弥喝食等ハ、大及諸犬士ふ茶を看め果子を薦る程ふ讀經の法師等と本堂へ取る鐘と撞鳴せゞ。沙弥等も伝らぶるふけり。登時ハ犬士ハ伴當ふ持せる袱裏を解開て。

て

ゐふく令ふ出ぬ。白麻の衣麻の社衿を被更れバ、大ハ素より袈裟法衣を。又執装ふ〜もるく。犬士と俱ふ身を起して齊一本堂ふ赴ら。俗と離れて客坐ふ居り。施主ハ成孝を首ふて犬士等ハ程よく列坐せり。既ふて讀經の法師十口許。同色の袈裟法衣ゆそうち連立て出ぬ来る。先本尊と膜拜まて。経案と並べる。左右二側ふ連り立て。銅鑼を鳴し。水魚を敲て梵唄數聲唱る程ふ。徐ふ出ぬる。住持の老僧萌葱紋紗の僧衣ふ純絲の錦綉の袈裟被てゐふ拂子を採れりける左右ふ従ふ両個の沙弥あり。爐を執り如意を執れり。住持則佛前の倚子ふ凭りて両筒の小瓶ふうち向ひて眼を閉く念誦を凝せゞ。高足發聲の法師其間毎ふ鐃鉢をうち鳴して。既ふ讀經を促がせゞ。衆僧各経巻の繙ひて異口同聲ふ誦出せゞ。住持も俱ふ聲を合せて。讀讀まること半响許。大も俱ふ是を帮助て同経同調聲を惜まず。清亮

と云て高けれ。宛春の百千鳥百囀のそゞ中ゝ加陵頻伽の聲ある如く清濁雲壞爭難る。衆僧憶ぎ睛と舉て驚て見て憚る色あり。恁而讀經果ゝ住持い倚子を退けて衆僧と共侶ゝ又經を讀梛児をうち鳴てうち匝る夕許ゝ番既ゝ輪り果ゝ時。住持則本尊を瞑拜して香を焼て佛足を戴て念ゝ訖りて退て小瓶の髑髏ゝ廻向ゝ水をゝ賻樒葉を採りて散ゝ眼を閉合掌ゝて春王安王弟兄と大塚匠作の法號を唱起ゝ且菩提を唱へ施主の功德を讃ゝ更ゝ諷誦文を諳讀ゝ訖て徐ゝ退て躯胡床ゝ着く程ゝ高足發聲の法師。鉦をうち鳴ゝて高く六字の名號を唱れい衆僧俱ゝ聲と合て連りゝ念佛ゝる程ゝ一僧身を起ゝ來て施主ゝ焼香を薦れい則戍孝を首ゝ大士ゝ皆迭代りゝ拔て出て焼香礼拜して退けゝ最後ゝ、大も焼香ゝ是ゝ法事ゝ果ゝけり。登時住持ゝ胡床を離れゝ先戍孝ゝうゝ向ひて改葬の功德を稱えて更ゝ、大ゝ名對面して且ゝ師兄を大禪師の高僧ゝ云ゝまると羨れい道師ゝ憑ゝ其ゝ義を後ゝ知られい憶ぎ無礼を仕りゝ。と勸解を、大ゝ夕あ云いで其義ゝ及ん拉納い客僧のゝ那三髑髏い和僧の道德ゝ緣ざるとを辭ざるべ。先追薬をいそゞせと云へとゝ住持い応と云て。辭して方丈へ退りけり。恁而大塚信濃戍孝い伴若黨漕地喜勘太と息部局平と召登て。西箇の小瓶と合ゝ下させて。却役僧ゝ案内と請へい役僧則先ゝ立て。春王安王の軀を瘞め。舊塚の傍ゝ造られむ諸大士、大も戍孝と共侶ゝ約て是を見るゝ只一丘の土饅頭のゝ朽る空都婆三本あり。戍孝の亦諸大士も愀然として。懷舊懷古の憂情ゝ勝ざりまを。然而在るべ云ゝ。あれば夫役等ゝ吩咐て件の塚を穿起さるゝ夫役等い皆ゝ云て則當寺の道人ゝ鋤鍬金鍬挺欽借出させて力と勸して穿程ゝ既ゝて日の暮ゝかゞ

犬士等則役僧ふ薪材を乞てあて無火ふて。夜作の便ふも既ふ故骨ふ逮ぶ時法師四口許出て来て。或ハ線香を焼或ハ木魚をうち鳴しつ。異口同音ふ讀經をふ程ふ、大も亦復是を帮助て讀。と約莫半晌許既ふあて讀訖て先春王安房觸髏を斂めくる小瓶を穿ふ下さまむ。當下法師等ハ、大ふ引導を請ーかば、大ハ謙讓三番ふて。饒もべくもあらざれば竟ふ左ふ蕉火を採り右ふ木鐸を撫て找て穿ふうち蒞て高く引導の語句を誦して。偈を唱へ喝を吐く其聲の妙音のこの骨相感あて猛かりて。且其眉間より。毫光粲然と散徹して。宛宕と照ふ似れり。金蓮寺の法師等ハ這光景ふ駭嘆て。敬服せざるはなしけり。這時匠作三戍の宕ハ距て西へ七八歩ふて夫役等を是を穿果ーかば戍孝則其觸髏を安葬して。四僧經を讀、大引導を。其所作始ふ異なるに。事既ふ果ーかば夫役等ふ命ふく鍬を採て三箇の葬穴を埋ふ。穿る時より最多無くて故の玉饅頭ふ做ーかば。寺僧等三箇の窣都婆を建く。香案を備ふ犬塚と首を。諸犬士都て焼香ふ果て却夫役等を叢て、大と俱ふ寺僧ふ引れて又客殿ふかの来る程ふ夜ふ入れば短くて道人が撞出る初更の鐘鎬々ふ。登時役僧出て来て、大犬士等ふ齋を薦む。夜分ふれば非時と唱ふ湯淘飯ふ。三四の菜蔬あり。伴當夫役局平もて皆従者子舎ふ聚合せて。夜飯の数待ふ遇る。當下戍孝ハ諸犬と俱ふ役僧ふうち向ひて。改葬非時の数待を謝して且ふ。我們ハ這回京師ふ。神號の勅額を衛なりて安房の稲村へ還者ふ。今ふ改葬ハ三日の忌ありふの故ふ一路人蜜崎照文と喚做る者伴當數十名を従へて守て本驛の客店ふ在り。我們主僕三十餘名。今日葬事ふ觸ー者ハ他と同宿をべくて勿論那三觸髏の為ふ。今日より来て三日追薦の佛事をせまく欲る。殊ふ自由ふ。ども三日の讀經果るまで我們主僕三十餘名ふ止宿を饒ーのえや。饒され難ハ驛内ふ。別ふ歇店を求むべ。

○文溪堂蔵

その誼什麼と談ずれバ。役僧共倶て弁じ易かり。方僧住持いつるあらず。御一路人の大禪師ハ活佛にて在べけれ。一宿とも東道せバ結縁の欽びありとて信服せざる然せる歎待あるを吅敎ひあへぬハ。銭までも在せかしと。只に成孝歎びて弁ハ幸ヨアかに就て同すくやなお。本驛に石工あるやあらバ。課て三箇の墓表を作せまく欲するのを。といふを役僧うち聞て。然あり這驛内に宇賀地野見六と喚做したる一個の石匠あり弟子両三名を使ひつゝ細工も亦拙からず。年来當山へ出入する定職匠でハべり。今宵人を遣して其義を心得させて。明日ハ夙めて参るべしと。と云ふに成孝欽び兼く。そも亦便宜のよかりた。必ず憑みたてまつると云ふに。役僧心得果て又遽しく退りけり。姑且て住持の老僧ハ一個の沙弥に指燭を秉らせて。徐に出て来つゝ、大と犬士等に非時の疎畧なりしを陪詫て且いふやう。只今役僧に示させぬれバ。御追薦の讀經の事ハ各當寺へ止宿のよしハ。都て心得侍りぬ。禪師ハ實に神僧なり。野衲等が及ぶ所にあらず。明日より二日の法事ハ。道守師に憑みたてまつると譲るを、大八ハ聞あへず、否々其誼に當らん。只是和僧の引接こそ施主の願ふ所なれと答て。餘談に既直びしかバ。住持いよいよ敬服して。敢又争辯せず。辭して方丈へ退りけり。既にして這客殿に他人あらずなりしかバ。道節がいふやう。犬塚和殿も最義に舘の賜りたる路費の黄白猶有べし。去れども我主僕百十數名あり。地に逗留の房銭と追薦三日の法事料并に祠堂金と建立三箇の墓石料に必や足らざるべし。故に我自餘の義兄弟等と夙く商量せる義あり。我先盤纏の餘るべきを三十金和殿に借まゐらせんといひつゝも懐を撈搠て件の金を取出せバ。下野親兵衛荘介豊後現八兵衛大学も各財嚢を解開きて。おのおの金を出す三十金を駝て一緒にうち合すれバ二百十両とぞ數れける。當下自餘の六犬士も倶にいふやう。犬塚今這金をもて和殿の急を資助る我們が断金の志ハ反て薄く。舘の御恩澤ハ究めて厚かり。そも和殿の孝

感ぜしよ。折らふありけるかと異口同様ふ稱れば戍孝ハ然へと応て件の金を受戴て懐る勒肚ふ楚と斂めそ答るゆう。寔ふ一心異體る。義兄弟ふあらざり甚。何人らよく我を資助ん哉も亦館の賜へ徒むらハ没らぢるべれど這儘先預てんと荅て感嘆ゆるける。這時、大ハ剛ふ登りて、姑且這里ふ在ざりけれバ後ふ去の義を汝知るべし。折らう又撞出ん人定鐘の响くゆゑ沙弥道人出て来て為ふ敢帳を垂れ臥簟を設て退げバ、大犬士ハ共侶ふ躰て枕ふ就ふけるゆの次の朝、大犬士ら俱ふ夙く起出て齋も既ふ果し。折役僧ゆ告るゆう。昨宵示さゆゆ義を石匠野見六許ふ遣しけるふ野見六ゆ目今地車二輛ふ墓石まく積登ゆ車奴五名六名ふ牽せゆゆ御客人犬塚主ふ拜面せまくゆとふけり。あくへ召せいハんやと。ふふ戍孝訝りて。開ハ心ふ疑るふ。敢へから。ゆハ召せゆと応をゆれば役僧ハ道人を招ふ。ゆて那野見六を召せけり。姑且して石工野見六ゆふ茶染の絹の

紬裡外套を重ね隨ふ握り持て客殿の邊ふ来ゆ。先役僧ハ會釋して却次の間ふ跪て。小可ハ宍賀地野見六ゆ。大塚様ハ在るやと問ば戍孝找ゆ出て。大塚信濃ハ則我ゆ汝ハ我を知るゆ。と問返されて野見六ゆ膝を找ゆ近づ。然ハ今より三十日有餘前の日ふ年紀五十八九る一個の武士我店舗ふ来ゆ。ひて三座の墓石を誂ゆ。石の小大ふ注文ゆ。是ハ當驛内る金蓮寺ふ建る墓表ぞかし。七月某の日までふ遅滞る造り出ゆ。其折安房の里見の家臣犬塚信濃戍孝と喚做ゆ武士の来ゆるゆ。墓石の價を遮與ゆ。心ゆてよと宣せゆ。小可巻て仰羨ゆ。然けれども此の内金を賜らぎハ作事の為創を致かゆ。其金子携へゆ。と問へ那武士沈吟して不古とよ今日ハ我懐ふ財ゆ。然ハ遅凝ゆ。とゆ。て。純金ゆる小鍔一枚と又純金ゆる両箇の鞘と含ゆ出て。これを小可ふ渡て宜ふ。ゆ三箇ゆ。純金ゆれば價十餘金ふ當ゆ。東西ゆ權且是を留

措えね犬塚ゞ来ぬるふ及びて墓石の價を取き折ふ豆易ふこそ志べけれと言正首ふ課されば小可則心沼果てゐる実一通を寫てまゐらせる時其姓名を問けるふ不吾我名ハ告るふ及ぎ徑ふ犬塚信濃と録ーね那人必知るよりゐらんと解示ーてゐ実を受含りそ。飄然として出ぎ紛ぬハ去徒而昨日ハ細工成就の紡東の日でひへ彫の如くふ彫果て施主方ゑ候程ふ昨宵御寺の役僧様より御使を下されて客人犬塚主の所要あり翌の朝用ふ出よとありーかゞ必是訛らきる。三笠固の墓表のゐるべー。と小可早く心沼て皆地車ふ乗せて参ひぬと言詳ふ報ーかゞ犬塚ゞ疑惑いさえ諸大士、大も訝りそ倶ふ眉を顰草ける。當下成孝ハ又野見六ふ向ひて汝ゞ今告知せゐる其事ハ実ゐるべー。ゐまども心沼ぎ那内金の代ふ受ーとふ鍔と鞘ゑとて来ゐるやと問れて野見六応も果ぎ懐紙をうち開て开ゐゐふ。とゐ件の二種を渡せば成孝受含りて左見右見ても思ひ沼ぎ自餘の大士ふ示ーてゐ。

見ゐ。這小鍔ハ童佩ゆゑ。ゐらんぎーん。鞘ハ桐葉ふ一の字を彫ゐ。是則今我佩ゐる短刀の鞘ふ似ゐ。這短刀の事ハ。ゐも犬川ーそよく知ゐれ。昔大父匠作翁の世ふ在そゐー時小母亀條刀自ふ取せゐひ去ゑ。故あ。我成孝ふ伝ゐ。桐一文字即是ゑ。

（桐一文字ふ作るべー。自他鞘の相似ゐハ要ゐゐゐぎゃと沈吟ーて役僧ふ向ひてふ言。暗記の失ゐ。皆當ふ。作者曰桐一文字ゑ先々の回ふ諺ー菊一文字ゑもあり。欲とあ。ゐ。）

言卒介ゐハ。ゐも當山の宝藏ふ春王安主君の像見ゐる短刀ハ。ゐぎゃ且當這寺内ゑ戦死ゐる大塚匠作三成の軀ハ。ゐふ。ゐけん且其折三成の身ふ着ゐる鎧衣身甲大刀ゐゑ藏ゐられぎ。ゐやと問へハ役僧も沈吟ーて否大塚翁の亡骸ハ當時總大将清方主の下知ふ。て市ふ乗ーゐと偽へ。ゐるのゑ。開ゐ大刀ゐゑ。ゐ。但ー春王安主君の短刀ハ今も藏めて宝藏ふ在り。只年の六月毎ふ出して虫を拂ふのゑ。とふゑ成孝ゐち。ゐて。ゐゐハ最自由ゐゐ。其短刀ゑ見まくゐーいで方丈へ願ぜ王

ひて。疾一見を饒ゝぬゝと請れて役僧推辭ふ由なく。応をあらず退れて。俟ることなくて。平晌許。徒而住持の老僧い那両口の短刀を。表皮の儘ふ役僧ふ持せて客殿へ出て。多く成孝をふうち向ひて。只今何ら奇事あるふよりら一見を請れる。那両公達の短刀を稍含ま出させのゆゑ。といへば役僧心ゆそ卒とそ遽與を短刀両口を成孝やとら受含まそ表皮の紐を解開れて。含ま出ゝて是を見るふ是則右ふ挿るべ長短い共ふ一尺有餘表裝い同様ゆそ両口ゆゑら鍔ゆけれゆらく疑訝りそ。住持と役僧ふ示ゝてふやう。這短刀あい鍔あゝゆ素ゆら徒而いやと問れて両僧驚ゆ見て不々鍔いありけるふ幾の程ゆ失ふけん不思議ゝゝ。

大士も俱ふあるふ悟れども。安定ふふよりるりけ。當下成孝膝拍鳴らゝそ是ゆく思い合されゆ。昌義ふ這野見六ふ三箇の墓石を誂て為らゝとふ。那武士い正ふ是我大父大塚公羽の亡魂の。假ふ顕れるゆゑあるむゆゑん。然ばゝそあれ両人公達の鍔を前

價の代ふあるら。且這鞘い土蝕あり。意ふ我大父の腰刀の戰死の折紛失ゝて年来土中ふ埋れる。其鞘ゝのみ含ま出されけん。今其所を知りがるを迷惑とを最も怪ゝ紀るゆゑゆゑやとらふ、大も諸大士も住持役僧野見六まで寔ふ然ゝ然もゝそとそ感嘆せざるいゆらけ。徒而成孝い件の二鍔を故の如く両箇の短刀の柄下ふ返ゝ納めそ。桐一文字の鞘を留めそ短刀をのみ返ゝてのふう目今見聞ゆひ。一大奇事もいへゆ。願ふい其短刀をのゝ多く。數る寺宝ふあるされて記録ふ載さゆゝ。と負めゆ住持を異説もるゝ。其義心ゆゆゆ法莚讀經ふ程もるければ退りそ准備をあるべゝとそ。其短刀両口を役僧ふ受含ま出せそ。弊ゝて奥へを退るけ。徒而成孝い又野見六ふ向ひてらふう。汝も既ふ知る如く。汝ふ墓碑を作らゝい我大父の靈るべ。事怪ふ過たれども。倘其事微りせばふふゝて今日速ふ墓石を建ることを汲べけんや。實ふ大父の賜る哉都の價い幾許ぞと。問へば野見六然ゝ。亡箇の御墓の石の價と細工料と相

共に十五金にて羨まるゝとゝろの成孝點頭て。則圓金十五枚を含ませ。別に一枚を相添て是を野見六に含ませていふやう。汝始より疑ひて那訛を果せゝば我が意外の便宜をゆるす。其一両に賞錢をとゝのへて野見六怡悦に堪ざるも有ごとにまぐ辱に御好意を受まつり及と心て金を財嚢に藏めて卒や御墓を建いんとゝらひて。躰て先に立び成孝に先其石を見んとそ俱に身を起せ。大禪師もうち連立て。外面投て出ける。姑且して道節ゝの哥々を思ふやらん昨今の奇哉去歳の四月結城に法會の折季基朝臣の御墓石を造りぬ。那十僧の奇事に似て。二の町なれば珍しかるべ。とゝを亂智推禁めそ。然るにひそ犬山甲と乙とは其事相似て。其趣に同ドかるべ是則正對へ刈又犬塚に孝子大ぐをめて孝王を感得して。其名を成孝とを是ものの孝感るゝぞや是も亦勸懲に係る所を思ひぞそ。只相似ゝちとのみにて。目屎の亡ぬ人なるべ。とひて呵々とうち笑へい道節も自

笑して敢又掛念せぞ。自餘の犬士と俱に及ぶやう犬阪解に穩當に誘ふ墓石を疾見ぞいあるべゝとゝひて俱に刀を引提て外面へとそ立ける。恁而八犬士、大禪師に野見六が造り做したる君臣三個の墓碑を見るに春王安王の墓表に石も最上にそ細工も精しく前々代なる當寺の住持の命ドなる弟兄の法號を彫做まそ嘉吉元年五月十六日と勒たり。這二基の墓表に今も垂井の金蓮寺に在り。又大塚に成の墓表に石も劣りて形狀小さく是に只義烈塚翁之墓と勒まゝ。這墓表に今有ぞを知ぞ然が大塚ぞの諸犬士、大禪師に共侶に是を見て是も亦那靈の心を用ひ所狀と思へらゝ感嘆に堪ず。小程に息部局平も夫役ぞも件の奇事を少知りて駭嘆ぜざるいなく。招ざれども出て來て壤を運び墳を築たり野見六を邦助に。かゝのまぞ半日なるべて二墓を皆建果て。野見六を辭に去りけり。折ゝ追薦の讀經をとゝ少えに。諸犬士、大い衣裳法衣を更めて。本堂に列坐

志ゐること昨日の如し。住持の導師を、大ゐ譲れども敢せず、大い猶客坐ゐ在りく助聲あるのミ。這次の日もかくの如し。二日ゐあて追薦の佛事果しかば成孝ゐい墓詣をそ。香と焼花をる賻け又客殿ゐ退いて義兄弟ゐと商量ゐつ役僧を招いよせく目録をそ布施を渡ゐ改葬三日の法事料金十両主僕三十餘名三宿の房錢金五両春王安王并ゐ二戒の祠堂料金三十五両通計五十金ゐると役僧見ばく執び受て退いて住持ゐ告て照書一通を呈閲ゐ其後又成孝い局平を客殿へ招いよせそいゐう。汝い大昨日より。弊ー去んとゐひーかど我留在らせーい。寮内を憑まく思へば抑汝の老實ゐ。徳ゐよりて料らぎも三髑髏を改葬ゐける執びい亦らべくもあらぎか。是を褒賞ゐ取ゐるぞとそ。圓金三十枚を與れば局平い夢ゐとぞうゐ天ゐ執び地ゐ喜びて受戴いつ懐へ楚と斂めそ答ゐる。然ゐぞのゐをせざりーゐ這大金を賜ひ。冥加あまりて胸安ゐ。是ゐて田圃を買殖ーて宅養と優ゐ養てん那里いゐ。

あゐも御道を仕らんと惴ゐを成孝ゐち笑て否とよ異ゐ路ゐあらぎ。改葬三日の忌いあも。今日ゐぞゐく果れば明日より東へ還る序ゐ小條村へ立よりて我外祖父母并丹三直秀翁夫妻の墓ゐ詣まく欲ゐ其頭の寮内を憑ゐのことゐと局平ゐ申ゐ。開い易ーとも易ゐ。と答て躯く伴當の居る穏所へ退りけり。當下成孝い夫役の老立ゐる者。両二名を召よせて。他ぢ穿を穿り墓碑を建く觸穢を罪敷ざりける其老實ゐる梓沁を巻て身浄の折乾ゐそ。小方金十片と今ゐ夫役ゐい皆小雀躍ーて執びざるへゐりける。左右ゐる程ゐ日の暮ーかば、大大士ゐい住持ゐ明日の別れを告て今宵ゐ亦這精舎ゐ明ゐ。詰朝い主僕厚く起出けるゐ役僧浴室の准備あるといへば大家迭代ゐ浴ゐそ已心閑の身を洗ゐ。這時大士ゐい漕地喜勘大を照文の宿所へ遣ーて今日這地を立去べゐ。と改葬及墓石の奇事を告ゐるぞ。照文も其ゐ。ゐる程あれば身装ーて俟ゐるべ。恁而、大諸大士い主僕の早飯果ると躯く故のぞくゐ彩装を整

たり。住持役僧等ふ別れを告て伴當夫役と局平等を將く。金蓮寺を立去て四くと
ゆくこと二町ふ過ぎ。照文も亦。紀二六以下の伴當ふ那勅額の長櫃を舁ち。這方と投て
き來ぬるふ逢ひけり。當時迭ふ近づく隨ふ一霎時路傍ふ立在く。會話をまり。开ゞ中ふ
照文へ今朝ぢ知りぬる那奇事をのゝ。そ犬塚ゞ孝感の幽冥ふ通ぜと稱賛も成孝へ
亦小條村へ立よらく欲まるゝ。さへ告ゞ皆四くめり是より亦主僕故の如く百十數
ぬ。局平へ拓華庵の墓所ふ井氏夫妻の墳墓ふ案内をも奴隷の母と夫役
ら。等へ憩ひて柴門の外面ふ在り。又局平へ水と汲ミ櫛を求め來て件の墓ふ建ゞ。當下
成孝へ找ゝて其墓を見るふ。親の話説ふ涙ぢ何人の建ぬけん。三重の墓石ありく。
直秀夫妻の法號と。歳月を勒ゝ。开ゞ右の方へ昔年父番作ゞ那二首級を悄
地ふ瘞めける処ぬべ。曩ふ局平ゞ穿起ゝ壤の。尚乾ぬ汚せ。土撥迹ふ似ぬ。成孝へ

あの墓あるを訝りぬ。跪ひ合掌て念ゞ。果て退けゞ自餘の犬士も、大禪師も迭代ふ
廻向ぬけり。偖而成孝へ又局平を案内ふて。拓華庵ふ呼門て。則庵主ふ對面を素
ぬ。村落の小道場ゆゑゞ客殿へ客ぬ。ヨヲ客を客ぬふ足らざれゞ、犬と自餘の犬士へ退
ひて外面ふ在り。或へ庵の檐廊ふ尻を掛るもあり。裏面へ庵主と同宿の老女僧と
居れり。當下成孝へ庵主ふ向ひて在俗へ安房の里見の家臣。犬塚信濃成孝と喚做
す者。當所ふ墓ある。井丹三直秀翁と其孺人へ我母の二親ゆゑゞ外戚の偶這地を過
るとき。參詣ふ俗と告て香奠の裏金一枚可を呈ゞ庵主へ満面ち笑て受戴
ぬ。佛前へ供ゞて却答ぬ。那井氏のゆゑも昔當庵の大檀那ゞ。嘉吉の乱ふ那
家滅亡て墓表ゞ。ゆゑ前代の庵主の時幾稔ち緣ゝて這庵室を再興の折
件の墓を建ぬ。昔年蚊牛と喚做す。庵主柱死て庵も共ふ燒亡ゞ。久ゝ無
住ゞ。前代の傳真庵主へ拙僧の師。原來和君へ那井氏ふ御外戚ふ欲

尚青年ふ見えゆゑ御孝順なるかなと。ふ間ふ同宿の女僧ゞ茶を煮て薦めけり當下成孝ハ茶を受飲こゝ列々と四下を見ゝ思ふ曰ク昔我父少かりし時這庵室ふ歌を投そ破戒を斬恩の庵主を誅して料らずも我母刀自ふ名告會のひゝ是天縁の盡ざる所。嬬伎の創成りしを我總角の比親の夜話ふ聴ふるを思ふ出さゝ今其庵ふ立ちそ後の庵主ふ逢んと一善一悪人同ドかゞ一去一来其地ハ同ド浮世ハ環ふ似たりけりと思ふ心を父ゞえふ知らぬ偽ゞ故事を人を知れぬ者ゞ庵主ふ向ひて件の刀ハ故りやあると尋るふ庵主答て朽果しれども由来あり思ひ出ゞ否那敗刀ハ然しゝ故もひ是十日有餘前の夜の事なるべし只今詣ゆひ墓の傍を穿起ち者あり狡と奪ひて其頭の土の異なれハ拙僧是を見て思ふ曰ク倘柱死せし人の亡骸を悄地ふ埋めそ埋める刃人の所為ならぬやと尋思ふれども措れぬ秘密なり其頭を穿返して見せけるふ那敗刀の出るのゝ白骨ゞふもあることなり刀ハ土中ふ久しく在けれ

朽ぬれば錆ふるゝねど好者もあるゝゝ。售らずやと思ふのゝと報るゝ成孝ハ答て思合まるとゝある故然氣ハ沈せ件の刀を請受て是を見るふ実ふ土中ふ幾稔歟埋れて在ふけん表裏ハ皆亡ぶれども鍔と刀ハ朽もせず且柄下ふ四字銘あり桐一文字と讀れ侍ぬ愕然と敬駕くまぞふ且感ド且歎ひて肚裏ふ思ふ曰ク原来這刀ハ我大父戰死の折ぬ腰ふ佩ひを我父其首級と共ふ奪ふ去て其首と共ふ那里へ埋めひけん我ハ親の話説ふ首級の事を聞ども這大刀ハ聞ぬ故ふ折ふ埋めひ疑ふ然ばそれ故ふ比大父の霊の前價代ふ野見六ふ合ふ生ひる鞘ハ則這刀の鞘なるを是も亦自然ふ出て疑ふべゝ介るふ這大刀ハ那ニ髑髏ふ猶下ふ在しゝ這故ふ局平ハ知らず穿出さゝりけんふ反て庵主の獲ふ出られて我視ふ被る未思議さよ。恁と知ねど那折ふ金蓮寺へ寄進せゞ故のゝ這大刀の壮衣ふ做ふ便りき事の暗合是も亦自然ふ出て鞘の出処を今正可ふ知る娯しさよと肚裏ふ自問自

拈華庵ホ
悌順勁力
拔見き
犬村
あん主
わ函

犬文
犬田
犬江
犬坂
犬山
犬川
つ伏ネ
犬湖
犬河

答と言ふ出さで然氣ゐく又庵主ゐうち向ひて這大刀咱等買とるべし。價い何ならんや。と問ふと庵主いやあぢ否價い愚僧も知ぎ鐚二百まれ二百まれ宜く取せのみ。とふ戍孝懐より金出を小方金二片を鼻紙ゐうち載く。卒そ庵主ゐ受給て怡悦ふ堪ぎあ過分る造化と謝して硯を曳きて受金手實と戍孝ふ寫て渡す聲高やふ尼前よ其頭ふ在刀祢们い主の一路人ぞあるむぎら。推並て茶をまゐらせぎやと追從歎待喋々ゐを女僧い答て否水ゐ汲のそ来てんとゐ桶を引提て出く東の方へ出と戍孝い訝そ又庵主ゐうち向そ這庵ふ井いゐをや。と問へば答て然い。素い這庭の東の方ふ清泉あり三六時中涌出て水ゐ富ひひふ十稔有餘前い秋酷く地震一時上の山る大石滑隊き井幹をうち砕ぢるを揺入て井を空ぢ。是より水を失ひ今でい四五町東る石滴を汲食りのみと告るを戍孝うちゐて開を不便ゐ。然でも庭の樹柱敏く剣東を大石ふ窒れきび這坐席の薄間ぢも

故ある加ゐとうひても又其石を見て檐廊ふ尻を掛る犬田豊後を喚被て哥々よ。和殿の膂力ゐ那大石を北のくへ轉し遣んも易ふべし。とゐ悌順合点て否我とくも。五大力士ふあらぢれどもくべい思ねども何事も人の為べ成敗不成敗試てんとうひて羅刹套を脱捨て野袴の稜袴を刀を背のくへ繞て身を起して其大石の邊へ杖を近づく猶ゐく胸ふ是を計るふ石の高い五尺許上尖りて下大く徑四五尺ゐべれば井を窒ぶも理ゐ。幾百貫匁あるやうん実ふ千曳の巨石ゐを悌順い物ともせび隻手を掛て推試ゐふ歯の揺ぐゐ如揺めぢけり是でい好と両ふを掛て曳と嘯て捩反せば千曳の巨石根を離れて只是臼を輾も像く悌順のゐふ従ゐて二三杖北のくへ移ゐを梵と推居けり大石既ふ除れ跡い地泉涌出く庭ふ溢れて已ざれば親兵衛道節現八兵衛い其頭ふあるけ圓石の軽重戍い八九十斤戍百斤有餘ゐを最も易像ふ食撓聚へく敗井の西ふ居ゐ立地ふ井幹成て其水溢れぢるふけり今這事の光景ふ庵主い

けゝ。庭門の邊ふ在りける局平も目今水を汲合せて久う未ふ付る同宿の女僧さ俱ふ
腾言を渡して引提へ桶を金落せば笹の斷離れて潑と散水ふ四下の人さへ辟易
たゝ大家吐ふ矣けり。姑且く大村大学ふ大田豊後ふ向そふ和殿并ふ犬江犬
山犬飼ふ力藝を見て庵主ふ水を汲させつゝ是も亦仁の一徳ゆゑ武の至りとゝ
べ。咱等ふ又文をとりて復泉の記を貽さんとゝ墨斗の筆を拔ぎて徐ふ件の古若ふ
找を近つけ翰を添て石の平坦る処へ記文一編を寫着るふ毫も稿を設るとゝ蓮の
糸を引く如く速ふ綴り果て編左ふ歌ゆゑ賛あけり。作者云這復泉の記ハ必漢文なるべ。
且文の詞ハ漢文ハ看官の反てゝ思ふもあらん。
故ふ少首にてあれ載ざる也。當下。亂智是を見て大田ゞ賛力ゆゑ及ぶべゝ大村の文も亦得
かゝ。然ゝゆゑ今言るゝ後ふ悔へかゝ。我も似而非歌を添んゆゑ。隨即其毫を借て
又一詠を寫へ。餘の六犬士も興ふ乗ゝ各歌を詠ぜゝ。次第を追ゝ録へ
蛋崎照文も庭門より找を入ゝ列々と見ゝ只管感嘆ゝを親兵衛急ふ喚

禁めゝ蛋崎叟々々。和殿ハ何ゝ一歌を惜ゝ俱ふ賛せざるゝとゝられて照文頭ふ
搔て咱等ふ風流ふ疎けれゝ這野計ふ入りかゝると辭ゝを親兵衛諸大士もゝ笑
はゝ敢饒ゝ開ゝ好もあれゝもあれ這大皇國人ふゝ這大皇國歌を讀ゝ水ふ栖む
蛙花ふ鳴く當ふも少るゝ。ゝゝと謔られて困ゝ一霎時沈吟ゝて稍其巨石ふ書
寫れゝ大ふ找を近つけゝ歩てゝみ見て莞尓とゝ笑て諸彦上旨くゝられる我も亦蛙ふ劣
ゝく歌ゝゝ歌ハ沼ゝまねゝも並ゝて恥を選ゝべゝゝゝとゝ且照文ふ筆を借て寫
果て又ゝ各恁玉を連ね歌を自筆ふのゝゝれゝも是鏤ゝるふゝゝれゝ竟ふ風
雨ふ磨滅て一句もあゝゝるゝ。庵主の為ふ加持あてんとゝ又石ふ向て數珠を
ゝと推揉て一霎時咒文を唱へ一喝あてゝ退ける。然ゝ這復泉の記も跋賛の十
歌も後百年を歴るまゝ石面ふ耗ゝて幽ふ讀れゝとゝふゝも是後の話ゝ當下八犬
士ハ聚合て復泉の記を默讀を讀果る時大学ハ代りて賛歌を唫誦ゝけり。其聲朗ふ

あて妙なれば拙き歌も笑ふ堪え方。自他送ふ唱嘆して欽びざるはなかりけり。然が其記文の後ふ詞章あり且十歌あり。文明十六年秋七月十六日大村大学頭金碗礼儀。拈華庵主の為ふ述ける復泉の記の後ふ題せり。一路人等ぐ十歌一賛左の如し。大塚信濃次成孝の孝感懐萱の歌も亦その中ふ在り。又礼儀を首とを石面各即事自筆ふ歌ふ曰。

賛歌第一　壮士まもらをぐ千曳の石をかたくてまみよる庵の苔清水かな　犬村礼儀

賛歌第二　埋れ井の石蓋ひらぬ漏く水ふかりちくの名をも流さん　大阪亂智

賛歌第三　信濃なる戸かくし山ふもとを神もあふぎまもる神なら神　犬飼信道

賛歌第四　山を拔くちからもあるふ健雄ぶる程まふ石のかたるのかな　犬田悌順

賛歌第五　井ハ成りぬ汲ども汲め雲近く水遠かりし山のとの庵　犬山忠與

賛歌第六　無乳母たらち絲の住ふ里ふ多て見れば山ふとろ氏宿もなつ　犬塚戌孝

賛歌第七　剣大刀二世ゑ工の本末とむ盛ハ後の庵あるじかな　犬川義任

賛歌第八　小篠原ふけつきそのの山ゑ井ふあろ汲見よのとまとの素　犬江仁

賛歌第九　糸芳宜ふあづる山邊のあのもゑ花をもげば秋の初風　蜜崎照文

賛歌第十　峯の松うろふ生ゑ風さふ設耳ハ禁麗のむろふ入るゆ　大禅師、大善柴不滅不断加持却火即滅ハ功徳水平等利益とぞありける。巧拙各差あれども。皆實詠ふあらぬもなければ知るも知らぬも推並て感嘆あるも故あるかな。偖而犬塚戌孝ハ又庵室ふ入り坐して且局平を召よせ更ふ庵主ふ向ひてのたまふ。唱等ハ是紈袴の身ゑ。其地も相距て亦近くねば異日の墓誌ハ究てかたしとぞ。局平を見ゑて那局平ハ我外祖。井直秀の老僕の子ゑ。舊縁もゆへ今より後ハ他をゑ。當庵の施主ふ做て。とゆふて局平を召近つけて。汝ハ素是老實家ゑ今よりして我ふ代ゑ井氏の墓ゑ守り絲りと。憑ゑつ懐を搔捞りて圓金十両を數出て。先其五両を庵主ふ

施し五両を局平に與へてければ。其五金と這五両は井氏の為に香華料なり。僧俗両個に等分て成孝がす志のことなれて含笑む庵主はさらなり局平は呆るゝまでに頭を擡りなる麼ら。あるは又思ひかけもなき郷尚の身に餘りたる御恩を受まつりし。這里の御墓を守れがとぞ折々草を芟拂ひ忌日に樒を賻るのみ。何ばかりの費あるべき然るを又這御金子を受まつるべきよしやと推辭ば庵主も倶にいひけるやう。郷尚もいへるとなり井氏は當庵開基の施主にて累代の檀那なりしかば其後なきを憐て先住の時墓を建にき。況忌日の香華をや。這御施入は要なしと辭ふを成孝推復して开は其該のみならず。外祖の祀を人に任せて愆なりの義に及ずは。枯者の為に宜からぬべからず。柱て愚意に従ひてよと論しつゝ金子を受納させ別を告て桐一文字の大刀を引提て立出れば庵主と女僧は満面春色ならぬ造作も物体るし御蔭で水とりけりに千葉茶蘼の花とも開せぬる功徳廣大弥陀佛なみと念じつゝ送れば亦局平も只得金子を受斂めて走下りつゝ両折戸の邊に跪居て待

たるべし這時大阪大江犬山犬村犬田犬飼なるの諸犬士は、大照丈と共倶に既に出て門前に在り成孝が來ぬると躲て伴當夫役を從へて又復路次といそがすを當下局平は犬塚を留めていひけるやう小可が自屋は是よりして遠からぬ郷尚に暇ある折に走くる老婆に御賜のヨメ金と毎井の首尾を報しなば他も歓び意外にまさく前より茶を煮て待なり卒立寄せぬべくしと請まを成孝少まで不否とよ這一路人ヨメ金に侯せて那里へ竝れんも遺憾く思へどもなまで袂を分つべしと叫て先伴若黨に吩咐て携さする桐一文字の大刀を箸笔の内に藏めさせて却局平に身の暇を念るゝまゝ躱て衆人と倶に路次といそぐを局平は猶去難て後に跟々來りけるを成孝も諸犬士も見かねて辭し諭しかば路十町許まで只得其里まで別を告て已が宿所へ還りける局平並に石亙野見六のみ。這下に詰説なし。然ば犬塚成孝は。件の桐一文字の大刀を異日刀匠に研せけるに素より鍛錬ある名刀なれば年来土中に在りしかど聊も土蝕せず又いふべくもあらざれば。則桐一文字の鞘と鍔さへ是に

皆具して表裝をも盡さゝるべ。桐一文字の短刀と大小一對の名物を做りて。後児孫あぞ偽へけ。故ある哉成孝の忠孝なる。那村両の大刀の如に久しく其身に物を做りあるを。毫毛も吝嗇の心なく。父の遺訓を果さんとて成氏主を返さゝるべ。いなぶ哉ならぎして。於是ふ祖傳の名刀を以て。便是天の配劑善ふ報ふ善を以て物の損益都皆善悪邪正ふ縁ざるとなり。世人多く這理を知ざるに不義の利を欲ふ者ふ貪りて慶食とるければ。那身ふ大損ふ一といへども子孫ふ迫りて禍あり咸失ざる者ふ。寡欲に其身のみならず。子孫長久の至寶なり。慎ざるべからざる。

同話休題

小程ふ八大士、大照文い。又五七日の旅宿をあり。武蔵國豊嶋郡柴浦ふ来りけり。今来る路の程菅菰大塚の郷ふ犬塚信濃が故郷ふ。二親の墓ふ香華院ふ在り。又犬川荘衣の母の紡婦塚あり。父犬川衛士の墓ふ伊豆の堀越ふ在り。又大塚ふ犬飼現八兵衛が実父糠父の墓もあれが。俱ふ立よりて墓詣をなく。後来不轉の香華料をも寄進せ

きくりけれども既ふ美濃路ふ改葬の觸穢已ことなぞ。俺留三日ふ及びふ今又其頭ふ路草を喫ふ。親の為といひぞ。公道を疎ふ為ふ私事ふ恥るよ。似なる墓詣の事いまも異日の便宜を俟ふ不如と思ひ久しく皆共侶ふ件の浦邊ふ逆りて。然ば這三大士ふ次の年ふ至りて義成主ふ願ひ稟あり。俱ふ大塚の郷ふ出て是なる社本意を果せ。又道節ふ父犬山道策と実母と女弟濱路の魂を招ぎて其墓を安房の延命寺ふ建立ふ。又犬阪下野ふ其父栗原の百亂度と嫡母稲城異母兄憂之丞女兄玉枕及実母の墓さへ右ふ同じ寺ふ建て子子孫孫ふ至るまで年忌月忌の祀怠なるとなり。這他犬村大学い初犬飼現八ふ伴れて舊里赤品を出て時実父母類父母及故妻雛衣の香華料をヨヌく香華院へ寄布ふ。其墓頽轉ぞくもゆるぞ。又犬田豊後ふ祖父母と母の墓ふ行徳ふ在り。父文五兵衛の墓ふ瀧田ふ在り。又犬江親兵衛の大父并ふ二親。山林房八と沼蒲の墓ふ市河の郷ふ在り。是等ふ里見の封内

るるに。且犬江屋依双と其妻水澪と迭代に詣て。忌日に香華を絶こなし。又政木大全も父河鯉守如の墓を建まく思ひて。その後里見殿に願ひ禀しく。那武藏豊嶋郡日比の寶傳寺に赴しに。那里い犬阪渟智が五十子の城に在りし時。孝嗣の為に。守如の墓を造建く。且寺の頽破に及びしを修復まるとその折紙て世知りて感涙坐に吐むまでに歎ぶと大々ならず。又永年の香華。墓所料ども既に渟智が寄布まるとて。今さら別に供養まべ。只香華院に墓ある。祖先と母の為に。まく香華料を寄進まけり。然るにそも犬阪い其朋友の為にも。恩る大功德を做し。ぐ友て孝嗣に告も知せ。其おのづから知るに隨せ。孝嗣深く感佩まて。稻村へかゝる。這度を渟智に出さ。君子と稱て。三拜の礼を行へども足まらとせず。是よりの後渟智に逢ふ毎に。必其席を避て諸兄の礼ある如く。敬ざる日へなりけり。是ぞい皆後の話説るれども。今語次宜しければ。集めく茲に結ぶのみ。間話休題。尓程に犬士、大照文い柴浦へ東号程に去向水陸の便宜を相議に。照文が曰。這里より水路を洲崎へ還らべ。速にまて便路るれども。勅額あり。御教書あり。然を風濤の害怕を思ひて。近江を負るべきに。あらまほしく下總を廢て上總に至る陸路を宜しかめと議まを、犬い曰。然る迂遠の路をもちて犬塚の改葬を。美濃路に三日を費まされば。日を縮めて早く還るべし。今尚秋暑の時。れば冬の海の暴に似ず。況八犬士の身を衛る靈玉あり。且勅額の故をもて。伏姫神の擁護もあらん。何ぞ害怕あるべきと議まれば。犬士皆諾るひく。師父の決断に。勇あり。理あり。徑に水路をくらべ。則這浦まく巨舶一艘を傭ひて。這度七月二十日の月の出る時候より。纜を解まに。果して順風るるりければ。同舶の主僕百十數名。枕を高くまるに。夢裏に舶の走ること。幾十里るりけ。次の日の巳の左側に洲崎の港口に入りぬけり。

作者云。本編い腹稿より。都文まくるとをりく。四十六の巻端に附録目を追加ま

たれども本文中皆故の題目のまゝ。附録目と省くべし。這一回は故の題目なれ所
ゝ且長編なれば別に附録目をもて一回とも。腹稿はあらかじめ法會の屢序
故に棄去べやと思ひしかども。開も又遺憾しけれども棄難て這一回も抑結城の
法會ともに續て白濱延命寺に改葬の事あり。其後又水陸施餓鬼大法
會あり。既にして最後に至て金蓮寺に追葬の事及拈華庵の結局あり。約
莫一部の稗史小説は恁まで佛事のうち續くを厭ひて終り果しぬ。作者の用
意を思へべ。蓋先祖父母弟兄の為に祀を乞ふ所は追薦の佛事法會を修
まる義は孝子忠信順孫義士の上に必欠べからざる所。本傳の大関目善を勸
め悪を懲す約束の終。這事多くは佛事い。孰も佛事。別に
せんとする者多ふ其事相似て其趣の異なるを好看官はおのづから知るべく克念
ふ者は厭食ふべ反く喜まるもの。左も右も老婆深切みづから長に評注蓋

將西とのく見るとなく。知音の友に庶幾とせし狹。

第百八十回中 義成功臣を重賞して八女を妻さ

却説八犬士、大照文に主僕百十數名。其船洲崎に着の後。則勅額と御
教書を相捧げて稲村に歸城して。這義を少え上れば。両家老東辰相荒川清
澄執達て。次の日義成主に見参さ。京師の首尾伏姫神に勅額の事、大を
大禪師に做されしこと。詳に少え上く。件の勅額と室町殿の御教書を
見せまゐらせば。義成主拜戴欣悦大ならざるも、大照文犬士を労ふ。
汝等は。徑に瀧田の城へ參らく。這義を老館に亶示上よ。勅額の事の異日の
沙汰あるべしと。休暇の命さへありしかば。件の九士一僧は。直に瀧田へ赴て。
義實発侯に拜見さ。其告まゐる事毎に義實欣びなべうもあらず。那歸路
ゆく三髑髏の事。桐一文字の大刀の事。美濃の金蓮寺と。信濃の拈華

庵ゆくゆく奇事犬田豊後が力技の千万人に勝れしうえ越に赴めて
ゆくゆく感嘆特にあさからぬ。只義成義通君。後に義成主の家臣
両家老諸士さえに件の奇事を知らく駭嘆せざるはなく皆戍孝の孝
感を偽へて稱賛をうけ。恁而義成主は有功の諸臣を賞禄の沙汰
あるべしとて一日龍田へ赴けば義實老侯と商量あらくとて國府臺の城の
番士の頭人真間井樅二郎継橋綿四郎潤就鶯手古内振照俱教二文明の
國府臺。鳥山真人はさらに行徳口の戍に置れる石亀次郎太越鄭三市河
る犬江屋依久両國河原る。向水五十三太枝獨鉆素手吉に至るまで
咸稲村へ召せられる。有恁一程に落鮎餘之七有種は詛夾院村るに法印
豪荊を招く。先度の謝恩の為にて穂北の井壮より詣来れば幸の折
るるとて。則犬山道節に課て其伴當と俱に稲村の城内に召置る。時に八月

十五日に黄道上吉の順日なれば國守里見左少將義成主烏帽子朝服を
今朝未の辰の比及に正廳に着坐あり。両家老八犬士諸侍皆尉夫手目衣長
社祢ゆく出仕せざるはなし。第一番に八犬士を召出して這回の軍功の賞として。
各一城の主に做さるべく。采邑各一萬貫文を賜ふべしと仰らる。但し上總の郡
縣廣く且富饒の地なれども。稲村へ遠ければ股肱の家臣を置べらるべきの故に
胡意當困ゆく宛行ふ。去の中犬江親兵衛は曩に上總なる舘山の城主に做
されしかども多事にあらざる在任せず且秩禄の定なるを這回改めく
當國舘山の城主とせ。其城なる地は遠き城郭を執建く在任せべ格式は
家老の上席ゆく上大夫なるべしと自親仰渡されて且東辰相をもく其城
邑の目録を成下されば君恩既に身に餘る。八犬士はおそるく共侶に羨ま
つるく退て其目録を拜見せられば恩賞都て異同なく仁の字をもて首とな

其次第左の如し。

安房國舘山城主　采邑一萬貫文　上大夫　犬江親兵衛尉金碗仁
同國東條城主　采邑一萬貫文　上大夫　犬塚信濃ゆ金碗戌孝
同國大懸城主　采邑一萬貫文　上大夫　犬阪下野ゆ金碗胤智
同國御厨城主　采邑一萬貫文　上大夫　犬村大學頭金碗礼儀
同國朝夷城主　采邑一萬貫文　上大夫　犬山道節帯刀先生金碗忠與
同國小長狹城主　采邑一萬貫文　上大夫　犬川長狹莊ゆ金碗義任
同國神餘城主　采邑一萬貫文　上大夫　犬飼現八兵衛佐金碗信道
同國那古城主　采邑一萬貫文　上大夫　犬田豊後ゆ金碗悌順

とぞ。次ゆ東六郎辰相。荒川兵庫助清澄を召よせて恩賞あり。這両家老い忠誠舊老氏元貞ゆ劣らぬ曩ゆ素藤對治の折も這回大敵防戰の日も進退よく度ゆ稱ゆ。備らざる所なし。ゆをりて采邑三千貫文の舊地ゆ今ゆ各二千貫文を加増を共ゆ本領五千貫文ゆべしと仰らる。次ゆ杣倉武者助直元堀内雜魚太郎貞住ゆ恩賞あり。他名ゆ這回の闘戰ゆ勲績伯仲を俱ゆ其父の重職を嗣ゆ足れり。ゆをりて家老を采邑い父の時の如く三千貫文ゆべしと仰渡されける。却其次ゆ政木大全孝嗣を召よせて。大田木の城主ゆ做さる。他い素藤對治の日も犬江親兵衛を帮助て戰功あり。郷ゆ又葛飾の閑戰ゆ其毎五十三太素手吉名。數十名を將く。御曹司の危戰を援まつて強敵長尾景春を防ぎ沿る。其軍功鮮少ぬ因く這恩賞あり。格式い四家老の次席ゆ。采邑五千貫文を賜ふべしと仰らる。次ゆ千代丸圖書助豊俊を召よせて。那身い都て約束違いぬ軍師胤智の計策ゆ從ふ。よく大敵を火攻ゆる。其大功既ゆ舊罪を償ゆ足れり。ゆをりて。舊地を返賜

アラク。故の如く上總國榎本の城主ヲ做さる。舊臣を召聚へ〻還任せべと。掟
ヲ次ヲ姥雪代四郎與保其孫十條力二郎。十條尺八郎滿呂復五郎重時。
滿呂再太郎信重安西赤太景重磯崎增松有親館持 傳仗朝
經大樟村主俊故名を一同ヲ召出し七與保ハ苛子崎の賊難以來屢大江
仁を帮助く。大功あり。ゆゑを推登し七兵頭ヲ做さる。十條力二尺八ヲ尚幼小なれ
ども。大母音音又兩母親曳を單節ヲ苦肉の計を行ひ。那大功の賞と
ゆゑ。第兄共ヲ次磨呂君の陪堂ヲ做さる月俸ハ二十口ヲ。十口を加增ゆゑ各三十口を
賜ふべしと。又重時信重景重有親ハ戰功孰も尠らず。ゆゑ〻重時を
兵頭ヲ做さる。信重景重有親ハ右衛門佐殿義通君ヲ仕へ俱ヲ近習するべし。
と仰らる。又朝經俊故ハ鄕邑賞を行れて。其地の長ヲ做されて。ひゆく民を憐
ゆゑ。循吏の操を德べし。ゆゑ掟ヲ其後落魄餘之七有種誼夾院豪

荊名義成。主ヲ見參を。這有種ハ義士八犬士のゆゑ。當家ヲ仕へざる以前より。
其帮助ヲ。ゆゑ〻と尠かゆゑ。と。ゆゑ況僅る小兵をもて。忍岡の城を拔ヲ
及く。犬山道節ヲ軍勞ヲ代り〻ヲ。最賞ゆゑべ。豪荊も亦俠者ゆゑ。有
種を帮助く。當家の為ヲ忠あり。ゆゑ〻ゆゑ有種ヲ。下總葛飾の郡ゆゑ新領
五百貫文を賜ふ。舊地穗北五ケ村と共ヲ宜く是を館領ゆゑべ。但房總ゆゑ東
南の一隅ヲ。他鄕の風俗を。ヲ知ヲ由ゆゑ。有種ハ幸ヲ武藏ヲ在り。生平ヲ隣
國の珍說を。ゆゑ〻。利害あり。ゆゑ稻村へ注進ゆゑべ。又豪荊ハ當家の祈願
所ヲ做さる。今より〻て年毎ヲ米粟百苞を賜ふべし。と。恩命あり。且有種の妻
重戶ハ賢女ゆゑ。よく良人を諫めて。衍德ゆゑ〻ゆゑ。ゆゑ〻ゆゑ。ゆゑ〻ゆゑ。
ゆゑ次ヲ石亀次國太。越鄕三。向水五十三太。枝獨鉆素手吉犬江屋依久。
俱ヲ見參を。饒されて。且恩賞あり。次國太ハ行德溫濱の長ヲ做され。且鄕

三い其次役ふせる。又依ゑ五十三太素手吉い故の如く市河西園河原ふ在住して。国府臺の城ふ事ある時。船隊の頭人さるべーとそ月俸各五十口と賜ふ。這四個の町人い或へ犬江親兵衛ふ従ひ或い政木大全ふ従ふて忠あり義あり。戰功あれば。倶ふ武士ふ執立く。苗字帯刀を允ーぬひけり。是等い皆新恩の毎あれば。賞を先ふせられーるべー。譜第の家臣の功ある者ふ恩賞い蜑崎十一郎照文を首とも。抑照文い。招賢の使を奉りそ、大法師と共侶ふ関の八州を巡歴ある始より。三ーび京師ふ使ある。功あるごとに。職禄を推登ーて。瀧田の城の大兵頭とも秩禄も亦加増ーて二千貫文を賜ふべー。且那身い男児ある故ふ親族の子ぺとらふ若黨直塚紀二六を女壻養嗣ふ。そ女児山鳩を妻せまくりとふ宿願も既ふ聞ー召容させ。ひ願ひの隨意ーるべーとく。則紀二六を召出さる。然べ直塚紀二六ら蜑崎十二郎照章と改名ーて義成主ふ見参ーも他い京師ふ在りる時犬江親兵衛の帮助ふ做りーとふ有功の者あれ。瀧田の城ふ番卒の頭人ふ做さるけり。這他戰功ある勇士の毎。小森但一郎高宗印東小六明相荒川太郎一郎清英鳥山真人由世い兵頭の上席を饒さる。又浦安牛助友勝田稅力助逸友登桐山八郎良千木曽二六禾子元田稅戸賀九郎逸時苫屋八郎景能を倶ふ稲村の兵頭ふ做さる。又小水門目堅宗鞆舩貝六郎敏宗足東峰崩三春高い瀧田の城の兵頭さるべ。白濱十郎七浦二郎朝夷三弥い故の如く。右衛門佐殿ふ仕へりて。近習の上席さるべーとそ。都く其秩禄を加増ーるべーとそ。各差あり。又真間井樅二郎秋季継橋綿四郎高梁泊就鳥平古内美容振照倶教二弘經等い舊禄各一倍の加恩あり。又須々利檀五郎二四的寄舎五郎い既ふ恩賞ありて。国府臺の城ふ在番せ。今番

又召よせく。其隊下の衆兵ハ白銀二百枚を賜ふ。五十三太素ゑ吉ハ乾兒數十名ハ賜ふ亦是ハ同じ。又鞆内兼四郎猨岡（又狙岡と作る）猿八漕地喜勘太詰茂佳橘名ハ月俸を加增あり。且白銀各二十枚を賜ふ。犬阪下野大江親兵衛執連ら。他名ハ拜見せざる者ゐれども。這餘諸軍兵都て恩賞ハ漏る者ゐ。最後ハ致仕の老臣杉倉木曾次氏元堀内藏人貞行并ハ小森篤宗浦安兼勝を召よせく。其兒子名の軍功の賞として氏元貞行ハ養老料。美田各五百貫文。備士兵馬ハ各三百貫文を賜ふべし。と仰らる。又東西和睦の祝壽を禀さんとて參り來る。上甘理墨之次弘世の使者天津九三四郎員明及莖野阿弥七椿村の隧次淚圓太名ハ就て來る。今井河原の木爪八安房上總下總ゐる。村長故老名ハ至るまで東西を賜ふ。勘くぞ。其後、大禪師を召よせく。義成みづから其年來の大功德を誉て。

宋版の一切經と唐の伯本立ゲ画ける白衣觀音の大懸幅と沈香十斤を賜ふ。又妙真音音曳多單節ハ共ハ女流ゐれば別席ハ召よせく。義成みづから其功を譽て。百両を賜りける。然ば這君恩ハ預る者。孰ろ拜舞せざるべ。歡びの聲内外ハ充て。被ど連々退るとて。一要時ハ推も分られず。國守の慈善と其富を仰ぎ感ぜざるゐりけり。偖而義成主ハ又、大禪師と八犬士名を召合せて宣ふやう。鄉尚ハ朝廷より。我姉君を神ハ做されて。賜りる勅額を。我息ふ。富山の品崖ハ石の禿倉を造り建て。藏めくして神體ハ做さる。品崖の前ハ石の鳥居を建て。勅額の摸寫字を掛べ。這我ハ禪師と八犬士名を奉祭して早く石工ハ課て。名聞ハ表べ。只清淨を旨とせよ。と言叮寧ハ仰せれば、大犬士名義りて。其次の日より作事を起して。面

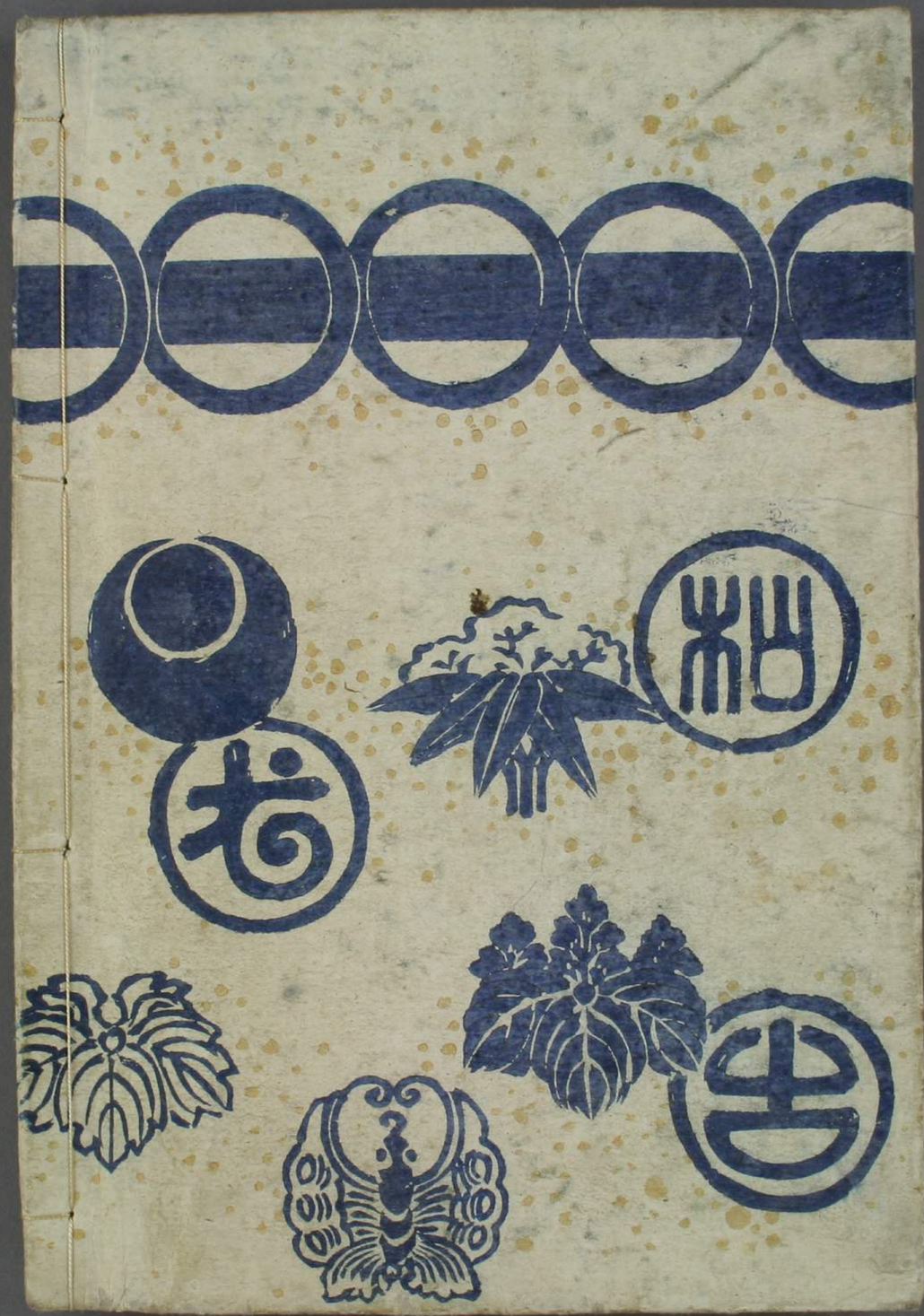
富山姫の神遷座行列

富山姫御祭禮
富山姫御祭禮

工事をいそぐ程に約莫二十日許にして。夙く落成をければ。則勅額を神體にして洲崎明神の神人等祝詞を誦し。法樂を献り。大禪師を用ひて師とし。大山寺及延命寺の衆徒讀經あて。遷座の作法を遂られ。遠近の男女山路を厭はず詣る者をヨヽクりける。有恁一程に上總なるに。故の椎津の城主真里谷信昭の嫡子。柳九。年十一歳にして。初て稲村に參勤し。老黨鞠谷毛大夫綺妙等伴當して。去稔父信昭の没後に。家臣等確執のあるに。参勤頗延引に及ぶとて。真里谷に里見の通家なれば。權且稲村の城内に留られ。柳九見参の日に黄金五枚と。土宜を呈して。贄とす。義成則柳九に大刀を賜ふ。の頃又義成主に八大士四家老等を召聚合て。八個の息女達を婚姻の一義あり。開ゝ又本回下の編に解分るを聽れかし。

南總里見八犬傳第九輯卷之五十終

十九編卷之五

五十

枚野
勝善院